2004年　アテネパラリンピックにて（右はIPC役員のスーさん）

第４３回

「福祉」から「スポーツ」へ、舵をきった男

藤原進一郎

fujiwara　shinichiro

今回のゲスト藤原進一郎さんは、日本最初の身体障害者スポーツセンターの運営を成功させ、そのあと全国各地につくられる施設運営の手本を示した、日本障害者スポーツの先駆者の一人。
障害者＝「患者」、障害者スポーツ＝「リハビリ」と捉えられることがほとんどだった1970年代に、施設利用者を「お客さん」としてもてなし、リハビリではなく「競技」「楽しみ」としての障害者スポーツの概念を全面的に打ち出した人物でもある。
パラリンピックをはじめ多くの国際大会で監督や総監督として選手を率いる一方、学校体育の指導法や障害者スポーツの指導法を体系立てて示すなど、その功績は多岐にわたっている。
控えめな語りでありながら、その考えは実にアグレッシブ。さまざまな立場で結果を残し、日本の障害者スポーツを引っぱってきた藤原さんが、これまでを振り返るとともに2020年とその先の障害者スポーツを動かす人々へメッセージを贈る。

聞き手／山本浩　文／髙橋玲美　構成／フォート・キシモト　写真／藤原進一郎、フォート・キシモト

戦後の町営グラウンドで陸上競技に打ち込んだ日々

―― 80歳を越えておられるのに体がきれている感じがしますが、運動はされていますか？

週に2、3回テニスをやってます。70歳を越してから始めました。子どものころに全然ボールを触ってないものですから、だめですね。散歩はずっとしていましたが、情けないですね。

―― いやいや、身のこなしも軽快ですから。ということは、体を動かしたいという欲求は常に持っていらっしゃる？

そういうのはありますね。何もない戦時中にボールなんか触らず育ってますから、球技と言われても体が動かないですけど、走れと言われれば若いころに培っていたものが出てきますね。好きなんでしょうね。

―― 岡山でお生まれになった。陸上競技をやっていらしたそうですね。何歳ごろからですか？

旧制中学(注1)1年生のときに終戦を迎え、それから数年後に町営グランドが整備されて陸上をやり始めたという感じでしたかね。ただ、やっていたと言っても教えてくれる人もいなかったし、後輩、友達と10人くらいで自由に、という感じでした。

―― 種目は何でしたか？

大学に入ってから110mハードルを。ハードルの練習はほとんどしたことないんですけど、試合にはちょこちょこ出ていました。負けるような試合には出ませんでしたが（笑）

1952年　中国・四国インカレ（松江）（右から2人目）

―― 負けず嫌いでしたか？

ま、そんなような感じでしたね（笑）この試合は勝負になる、というようなものを選んでいました。

複数の中学校で体育教育に邁進（まいしん）

―― 岡山県というと、人見絹枝さんや有森裕子さんなど、才能ある陸上競技選手を輩出していますよね。進学は岡山大学を選択されましたが、どのような将来を思い描いて？

母親が病気がちだったものですから、早く一人立ちしたいという思いがあって。昔の師範学校で、今で言う短大で中等2年課程でした。陸上競技も続けていて、大学のときにインカレなんかも出るには出たんですけど、練習はまともにした記憶がないですね。

―― 大学生のときは、将来教師になろうと思っていたのですか？

教員の養成学校ですから……。まあ子どもでしたから、当時はそこが受かりやすかった、教員になりやすかったっていうくらいのものじゃなかったかと思います。

―― そして実際に教師になられました。

大阪駅の近くの中学校に7年、そのあと体操学校と呼ばれるほどスポーツの盛んだった中学校に9年、そのあとの5年は、在日韓国人が全校生徒の4割という中学校におりました。

―― そこで障害者の教育に関わるといったようなことは？

まったくありません。中学校の教師を21年間やりまして、同僚には障害児の学校教育で有名な先生もいましたが、私自身としてはほとんど記憶にないですね（笑）そういえば耳の不自由な子がいたなあとか、1年間担任したけど1回ものを言った記憶がないっていう子もいたな、と今振り返ったら思いますけど、そんないい加減な教師でした。

1933年　幼児期（1年2ヵ月）

（注1）1947年に学校教育法が施行される前の日本で、男子に対して中等教育を行っていた5年制の学校

（注2）正式名称は全日本中学通信陸上競技大会。日本陸上競技連盟、日本中学校体育連盟と各都道府県の陸上競技協会、中学校体育連盟が主催する中学生の陸上競技大会。

―― では周りに障害児とおぼしき子はいたけれど、当時そちらにあまり自分の視線は向いていなかったということですね。
学校体育を自分なりに一生懸命やったという記憶はあります。今も同窓会なんていうと子どもたちが大勢集まってくれますから、それはがんばったのかなとは思いますが。

―― 教師をしている間はおもに体育の先生として、教育に携わっておられた。岡山大学にいたときから将来は体育の先生を考えていましたか？
はい、免許状も保健体育でとっています。

1958年　修学旅行の列車内で生徒と

1958年　修学旅行で江ノ島へ

1967年　全国学校体育研究大会研究授業（中央）

―― 中学にいたときには部活の指導もされたのですか？
ええ、当然のように。陸上部の指導をしていました。

―― たくさん強い選手を育てた？
放送陸上(注2)で優勝させた選手もいます。大阪での総合優勝もあります。

―― 厳しい先生でしたか？ 同じことを何度もくり返して練習させるといったような。
最初は体育の授業にのめりこんでいたのでそういうところがあったように思いますけど、途中からそれではまずいなと思うようになって。子どもたちが何を求めているのかということに気づかず「これが基礎や」とか、もっとひどいと「俺はこうやったからこうやれ」とか……。下手するとそうなるじゃないですか。そうではなく、少しは子どもたちの思いを理解できるようになりましたね。

―― そういった方針転換のきっかけになるような、影響を受けた方などはいたのですか？
最初に7年間いた学校の先輩には、教材研究の手ほどきを受けました。次の学校には大阪の学校体育の中心的な先生がいて、その方に手取り足取り教えていただきましたね。帰りに一緒に酒を飲んだりもしながら。最後の学校では、私より年下の先生で、私の思いを話すとすぐに自分の授業で実践してくれるような熱心な先生がいました。振り返ると、人にも恵まれた教師生活でした。

陸上競技協会の任務で障害者スポーツに触れる

―― 30代では大阪陸上競技協会や中学校体育連盟の理事をされていましたね。週末は試合の設定とか役員とか、いろいろなさったわけですか？
週末は協会などの雑用係をずっとしてきましたね。そんな経験が大阪市身体障害者スポーツセンター（現：大阪市長居障がい者スポーツセンター）での勤務につながったのかと思います。

―― 中学の先生を辞めた理由は何だったのですか？
嫌になって辞めたわけじゃないんです。ただ、教師

も40歳を越してくると教頭だ何とかだっていうのが話題になりはじめるのですが、そこは自分にとっては魅力がなくて……。理由と言われるとそんなところも1つですね。1964年東京オリンピックのころから公のスポーツ関連施設の管理者に民間の競技団体の関係者が入るような傾向があったんです。で、私も陸上競技場の話を聞いたことはあったんですが、あまり魅力を感じませんでした。この大阪市身体障害者スポーツセンターは単なる貸館ではなく、面白そうだなと思って、こちらにきました。

―― 教育現場に21年いらして、終盤には多少障害者にも関わっておられたでしょう？

はい。これは陸協の関係でしたが、東京パラリンピックから少し経ったころに。日本の政策が経済成長に比重がかかって福祉がちょっとおろそかになっていたというタイミングで、大阪市がリハビリテーションセンターをあと回しにして障害者のスポーツセンターみたいなものをつくることになり、少しは手伝ってくれと言われたりもしていました。それと、東京パラリンピックのときにつくられたルール解説みたいな本があったんですが、これを大阪の障害者の大会をやるにあたって整理してくれと言われて。審判のためのルールブックですね。実際は、整理を始めたものの、医学や福祉関連の用語ばかりでよくわからなかったものですからいい加減につくってしまい、あとで「読むのに難儀したよ」と言われました（笑）しかしその流れで、次の年からは「私が一番知っている」ということになり、審判長をやれと頼み込まれて。

―― それは何年のことですか？

昭和44、5年ごろですね。そうこうするうちに、今度は全国大会なんかにもついて行ってくれと言われて。

―― では、大阪陸上競技協会として初めて障害者スポーツに関わった仕事が藤原さんのところにきた、というわけなんですね。

まあ、私が確かだからっていうんじゃなくて、暇そうなやつにということだったんだと思います。大阪陸上競技協会ではいろんな仕事をやらされました。陸上競技場の下にトレーニングセンターがあったのですが、そこの指導を大阪陸上競技協会がしていまして、ついては「お前も勉強せえ」と言われて日本体育協会のトレーナーの2級、1級の資格をとって指導員をしたりもしました。

―― 中学校の教員、部活指導のかたわら、大阪陸上競技協会でも指導の資格をとっていろいろとやっていらした？ お忙しかったでしょう。

まあいろんなところで手を抜いてやりくりしていたわけですけど（笑） 自慢話になりますが、私のいた学校は全国学校体育研究指定校にもなりましたし、全国表彰も2校で受けました。指導法の本をつくって教科書みたいに活用してもらったり、体育の授業には一生懸命取り組みましたよ。

―― 本をまとめる前は、障害者の教育にはまったく触れていないわけですか？

そうですね。昭和43、4年ごろ、ルール集に触っていたくらいですかね。医学用語はわからんですし、保健体育をやっていましたといっても学校の保健と医療はまったく違いますし、「脊損（脊椎損傷）」と言われたってわけがわかりませんし。障害者というと、みんな車いすに乗っているのかと思ったら、そうでもないですしね。

「真っ白な壁に好きな絵を」全国初の身体障害者スポーツセンターで手腕

―― 大阪市身体障害者スポーツセンターに誘われた当初は教員の気分も半分残っていたようですが、完全にスポーツセンターの専従になろうと思ったのはなぜですか？

まあ、こっちに気持ちが引っぱられたし……。それと、こっちの初代館長に「やめて来いや」と口説かれたことがあって。「福祉については長年俺が役所でやってきたので任せてくれ。医療サイドについてはドクターに引き受けてもらえる。スポーツのことを頼む。真っ白な白壁にお前の好きなように絵を描いてくれ」と。そんなこともあって、よしじゃあ行くか、となりました。本当に好きなように絵を描かせてもらえましたね。今振り返ると、初代館長は「スポーツ」といったときに競技スポーツという狭い範囲しか頭になかったようなところがありましたが、自分は学校体育のバックボーンがあったので、そこが違ったとは思います。

1958年
三都市教員対抗陸上400mリレー
西畑から藤原のバトンパス

―― 学校の教員からスポーツセンター勤務へと変わったわけですが、生活サイクルは変わりましたか？

教員時代は日曜が休みだったのですが、まあ日曜もグラウンドに出てましたから休みがなくて。その代わり、スポーツセンター専従になってからは、確実に水曜に休みがとれるようになりましたね。大阪陸上競技協会の関係は、理事の任期が1年残っていたので、それには顔を出していました。トレーニングセンターでの指導の仕事は、すぱっと辞めました。

―― 対象が健常者から障害者へと移ったことで、ギャップは感じなかったですか？

ここへ来てから29年、障害者スポーツにはだいぶ絡んできましたが、さしあたってこれということは出てこないですね。ただ、現在の学校での障害児への対応は十分行き届いていないようで、たとえば夏休みの水泳教室にきた子どものお母さんなどからは、学校への不服をいろいろと聞きました。うちで水泳教室を1週間開催したあと、「この続きは学校にお返ししますのでみてもらってください」と言ったところ、お母さん方から口々に学校の先生に対する不満が出てきてびっくりしたんですね。

―― スポーツセンターの指導と学校の指導は何が違ったということでしたか？

「学校は手を抜いている」っていうことでしたね。私が学校にいたころ、一時「学校教育はここまで」と線を引いて「それ以上は関知しない」というムードがありました。余計なことをやってケガでもさせたら大騒ぎなので、というような……。まあ、ケガは今もそうでしょうけど。それで「先生、もっとちゃんとやってよ」っていうのがあったのかな。だからといって学校でやらないといけないことをここでやるのもなあ、と思いながらも、スポーツセンターならばもっとやってあげられると感じましたね。

現在の長居障がい者スポーツセンター全景

利用者は「お客さん」障害者スポーツに持ち込んだ“危険思想”？

―― 指導課長をしていらしたときにはどんなことを。

開館当初から「いつ1人で来られても、仲間や指導者がいて、いろんなスポーツに親しめるような施設管理をしよう」と思っていました。そして、障害のある人たちのスポーツの生活化を進めようと思っていました。

―― 当時の利用者はどんな方々でしたか？

昔は身体障害が主で、案外お年寄りも多かったように思いますね。予想していたより多かった。まあ、もともと子どもばっかり扱っていたわけですから、余計にそう思ったのかもしれませんが。現在は逆に、知的障害の人が多い。これは手をかけるところが違います。今は知的障害が全体の3割に及びます。65歳以上が1／4、全体の半数以上が50歳以上です。

―― 1974年にセンターに来たころは、どんな活動をされましたか？

とにかく個人利用がしやすいようにしました。1日団体へ貸し切りみたいなものをなるべく避けました。そして、スポーツ教室の開催、仲間づくり（スポーツクラブの組織）などに力を入れました。

―― 利用者はどんな様子で集まってきていましたか？

とにかく泳ぎに来るんだっていうような目的のはっきりした人もいましたが、むしろ「なんとなく来てみた」「何か面白いことがあるかな」といった人が主流でしたね。そんな人たちに対して、「卓球教室をやりましょう」「水泳教室をやりましょう」と、来る人々に仲間づくりをしてもらい、知識と多少の技能を持ってもらうことで、障害のある人たちの生活にスポーツが根付くようにという目的意識で臨みました。やはりそれには、どうしても仲間がいないといけません。ここにさえ来てくれれば、施設と、多少指導してくれる人もいる、仲間もいるということを知ってもらいたかったですね。たとえば最初は仲間づく

りのために、水泳教室も2つに分けてですね、まずは泳力のある人はプールサイドでおしゃべりするようなクラブづくりがあってもいいかなと。これが契機で、現在は全国レベルの水泳連盟に発展しています。それでよかったと思います。

―― どんな種目で教室を？

アーチェリー、卓球、水泳などでしたね。同じ人に毎回教室にこられるとたくさんの人に参加してもらえないから、教室は一定期間で卒業してもらって、クラブに引き受けてもらうという流れを大切にしていました。

―― 利用者との関わりで気をつけていたことなどはありますか？

利用者の代表と頻繁に対話をして、利用しやすい環境をつくりました。この個人利用重視の姿勢は今でも残っていると思います。ここで行ったことは、その後各地につくられたセンターにも話し、連携を取るようにしました。

―― 大阪身体障害者スポーツセンターは全国のトップをきってつくられた身体障害者スポーツセンターですね。始めた当初は、他にあまり手本とするところがなかったわけですよね？

私たちは利用者を「お客さん」と呼んでいたのですが、それまで障害者を「患者」とか「訓練生」として扱っていた障害者関連施設においてこれはとても異質なことだったようで、「障害者スポーツの世界に危険な思想が入ってきかけているから気を付けないといけない」と注意してくれた人もあって。「お客さん」という考え方で接していることを当時、危険な思想ととる人もいたみたいですね。

―― 藤原さんがそういった、先の言葉を借りれば“危険な空気”にしようとしたのはどうしてだったのですか？

このスポーツセンターは狭い意味のリハビリテーションセンターではないわけですから、患者という接し方はしなかった。ですから、ここで働いてもらっていた理学療法士にも作業療法士にも白衣は着せませんでしたね。

―― その他の点で、他のスポーツセンターと大阪身体障害者スポーツセンターとの違いはありましたか？

まあ全国まわって見ているわけじゃないのでわかりませんが、特に公立の施設はだいたい大きな体育館だけとか、あとはプールと武道場が備わっているくらいのものが多いんですね。そういうのは個人利用の多い障害者には使いにくいなと思うんです。ここは、単に体育館を仕切るといったことではなく、卓球がしたければ卓球室というのがちゃんとある。細かく用途に応じた小部屋になっていますので、使いやすいですし便利です。

―― 関西のよい面、お客さんを大事にするという姿勢が感じられますね。

1997年 “ふれ愛ピック大阪”で皇太子ご夫妻にご説明

1987年 三笠宮妃殿下センターご視察

パラリンピックでも「勝つ！」競技スポーツの意識で大会へ

―― 1981年からは日本身体障害者スポーツ協会（現、日本障がい者スポーツ協会）の技術委員長もお受けになる。どういったいきさつでしたか？

1980年アーネムパラリンピックの開会式のときにすべての選手団がフィールドに入りきらず、溢れた大半の役員がスタンドで式を観たということがありました。そこで、ストーク・マンデビル競技連盟の理事をしておられた中村裕先生が隣席に座られて、「日本の協会も少なくとも医学委員会と技術委員会くらいの専門委員会がないとうまくやっていかれんようになる」という話をされ、帰国してから当時日本障害者スポーツ協会会長だった葛西嘉資（かさいよしすけ）さんにこれを伝えるので、そのときは頼む、と。ところが専門委員会などをつくっても、協会では旅費などは出せないということで、大阪には頼みやすいということもあり私が名指しされたという流れです。年にたった1回、委員会を開きましたね。そのあと、井手精一郎さんが常務理事でこられて委員会もより機能するようになり、旅費もスポーツ協会で持てるようになって広がっていきました。井手さんの指示で、副委員長も依頼しましたね。

1977年　第2回FESPIC大会にコーチとして参加（パラマッタ/オーストラリア）（右から2人目）

―― パラリンピックに初めていらしたのは、81年のアーネムですか？

そうです。その前には、ストーク・マンデビル競技大会にも2回ほど行ってますね。

―― そのときの立場は何でしたか？

私が行ったときくらいから競技スポーツの発想になり、コーチとか、監督という立場になります。私が行く前までは特に名前もなく、介護人、かつぎ屋さんみたいな感じでした。

―― スポーツの下地をしっかり持っている藤原さんの存在が、障害者のスポーツを導き始めたのですね。大会出場前には合宿なんかもされたんですか？

やりました。そもそも合宿はエントリーをするために一度やらせてみて、という意味合いのものでした。ですから、合宿に呼んでから落としたっていうのは1回か2回かしかありません。

―― ストーク・マンデビルでは、コーチ、選手ともに「勝つぞ！」の意識はありましたか？「日の丸をつけて勝つんだ！」みたいな。

それはそうですね。競技会に行くんですから勝つために臨むでしょう。

―― 参加することに意義がある、ではなく？

そりゃあ、誰が言ったか知らないけど、そんなとこだけ取り出しても……（笑）　まあ最初は飛行機も遠征も慣れてないわけですから、慣れるという目的みたいなものもありますが、スポーツ大会に行くというスタンスは我々健常者と同じじゃないでしょうか。選手もコーチも含めて。少なくとも私はずっとそういう接し方をしていましたし。

1977年　第2回FESPIC大会（パラマッタ/オーストラリア）（後列左端）

1979年　初めて参加したストーク・マンデビル大会で跳躍審判員を務める（右）

1980年　アーネムパラリンピック開会式、コーチ

―― ストーク・マンデビル大会でも、毎回それなりに準備をして勝ちに行っていたのですか？今のパラリンピックではメダルの意識が強くなっていると言われていますが、当時もその意識はあったということなんですね。

まあ特別に、というのではないですけど、競技会ですからね。確かに、まず競技そのものを知らない、慣れてないというのは選手にはありました。その点では手がかかるというのはありますが、気持ちの上では、勝ち負けにかける思いはあったと思いますよ。

―― かつては、障害者にとっては何よりもまず社会参加という目標があった。スポーツは、そのためのツールというわけですね。それが藤原さんの代から、目的としてのスポーツへの転換があったということですね。

意識的にはやってませんけどね。「お客さん」の話もそうですけど、多少私みたいなのが、障害者の世界に表立ってスポーツ、競技を持ち込んだ最初の男というのはあるでしょうね。

―― 海外の大会に行って、日本との違いのようなものは感じましたか？

ストーク・マンデビル病院という、ロンドンから北に1時間くらいの街アイレスベリーにある病院で大会が育ったんですけど、アイレスベリーと大阪を比べると、物理的には大阪の方がいくらかましなんじゃないかと思ったりします。物理的というのは段差とかそういったことですね。よく段差は2cmがいい3cmがいい、といったことが日本では話題になりますけど、そんな細かいことを言ったら外国の多くの街はいろいろと危ないことだらけですよ、ただ、アイレスベリーの人々は街を歩いていて、障害者に対して何も言わなくてもすぐにすっと手を貸してくれるが、日本人はお願いすれば手を貸してくれるという感じで、ちょっと引っ込み思案かなと思います。

―― アトランタパラリンピックでは総監督でした。

このときはけっこうメダルを穫ってます。当時は選手の層が薄かったですけどね。最近は選手も代が替わってきてますので、気安く声をかけられるような選手もほとんどなくなりましたが、先日競技会の様子を見ましたが、東京へ向けてもっと強化してもらわないといけないなと感じましたね。マスコミではどうしても「金メダルいくつ」っていう話が出ますので、言いづらいですけど、そのことも含めて、各競技団体は選手強化に取りかかってほしいですね。

1980年　アーネムパラリンピック開会式後のスタンド
コーチ（左から2人目が藤原進一郎、右から4人目が中村博士）

1996年　アトランタパラリンピック前に
磯村大阪市長を表敬訪問（後列右から3人目）

1998年　長野パラリンピック

スポーツ基本法の施行と現場の反応

―― 一方で、大学でも教鞭をとっておられました。身体障害者教育の理論的な体系の構築みたいなものにも、力を注いでこられたのではないですか？

それまで何となく必要にかられてやっていた資料づくりの延長、といった感じですけどね。

―― 大学の先生をしている間に、学生達の、身体障害者に対する意識の変遷といったものは感じましたか？

このごろは、障害者スポーツの現場に望んで携わりたいなという子が若干増えてきてるような感じはしますね。10年前と比べると、授業を受ける態度の積極性が少し違う気もします。

スポーツ庁始動へ向け現場は積極的な働きかけを

―― 厚生労働省から文部科学省へ、そしてスポーツ庁に障害者のスポーツが移管されます。この所轄官庁の変化については現場ではどう捉えていますか？

これは私は非常に気になりまして、障害者スポーツ協会などにもしきりに聞いてみたんですけど、実感としてまだ伝わってこないんですね。今のところ私たちにわかるような話は聞いてないですね。文部科学省に移ってから、内容は知りませんが全国大会なんかも変えていこうという議論は始まっているようですが。

―― 文部科学省で一元的に、草の根的な要求に対応できるという期待値はこれまでよりも上がるんではないかと私は思いますが。一方でスポーツ庁への期待はいかがですか？

これは私どもも気になるところです。現在障害者スポーツの第一線にいる人に聞くと「そんな話が出てますよ」くらいの捉え方のようでしたが、しばらく時間がかかりそうです。だから逆にもっと現場のほうが先取りして騒いでみたりするといいのではないかなと、ちょっと思ったりもしますね。こっちからスポーツ庁に要求に行けばいいのに、くらいに私は思うんですけどね。

―― 「障害者スポーツの問題はここにある」と早くから言って、その要望をさらうようにしてスポーツ庁が始まるという順序がよいのでは、ということですね。

私も国の役人をやったことがないのでわかりませんが、いろんな要求に応えるのは大変でしょうけ

2001年　大阪パラリンピック招致活動（モスクワIOC総会にて）

2006年　FESPIC大会（クアラルンプール）。畑田会長より連盟表彰受彰

ど、だからこそ先に先に言っとかないといけないなと。

2020年に期待される変革とは

―― 2020年はどう迎えますか？
長野冬季パラリンピックをやったときに、大きな動きがあったと私は思ってます。このとき、障害者スポーツが大きく動いたと。全国大会も、スポーツ協会そのものも変わりましたし、知的障害との連携も生まれたし。だから、2020年には期待します。

―― 1998年に大きな変革がみられたように、2020年も契機になればいいですね。
新しい委員会をつくる話なんかも聞こえてきますが、まあいろんな問題が解決されるといいですね。

―― 問題とは、たとえばどんなものですか？
組織的なところが、やっぱりもともとが厚労省ですから、スポーツ的ではないところがありますね。日本障害者スポーツ協会も最近になって厚生労働省のOBではなく民間から会長が選ばれて、そうするとやはり、1年2年でさまざまなことが変わってきています。各県にもスポーツ協会みたいなものがあって、スタッフの人数も増えてきていますが、協会、競技団体と指導者の3つの組織が一緒になって、いろんなことを進行させようといったことが話し合われたりしているようですね。障害者だけのスポーツではなく、みんなでスポーツの振興に力を注いでいきたいですね。

―― 障害者スポーツ指導員と一般のスポーツのスポーツ推進委員、ここらへんがうまく合体してますますパワーアップするべきといったことも求められています。横の繋がりは非常に大切ですね。

協会の指導者制度は、私も協会の担当者と、日本体育協会の制度を参考にしてつくりました。現在は2万ちょっとの資格者がいるんです。

―― 資格制度が必ずしも、社会の中でいまいち活きていないといったことですか？
私自身もそうですけど、勉強として、あるいは仕事に必要で資格をとったもののそのままになっていたり、という人は多いと思いますね。

―― 薬剤師は薬剤師の資格をとったらその資格で生活しますよね。スポーツでも、資格をとったら活用しないともったいないじゃないかというような。
現実は紙に書いてある理想通りにはなりませんねえ。まあ20年をきっかけに、もうちょっと発展できたらいいですねえ。

―― もう1つの問題は、細分化された組織をどう行き届いた形でパワーアップさせるかだと思うんですが、いかがでしょう。
スポーツはひとりではできないわけですから、仲間をつくってというのが必要になるわけですけど、特に県のスポーツ協会といったって、まだまだきちんとした組織になっていないところが多いですね。

―― これは2020年、しっかり目を見開いていないといけませんね。どうもありがとうございました。

2014年　平野中学同窓会に恩師として出席

スポーツ歴史の検証
Sport History

藤原進一郎氏 略歴　世相

1932 藤原進一郎氏、岡山県に生まれる

1945 第二次世界大戦が終戦
1947 日本国憲法が施行
1950 朝鮮戦争が勃発
1951 安全保障条約を締結

1953 藤原進一郎氏、大阪市立豊崎中学校の保健体育科担当教諭に着任

1955 日本の高度経済成長の開始

1964 昭和39
東京パラリンピック開催
財団法人日本肢体不自由者リハビリテーション協会（現、公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会）設立
1964 東海道新幹線が開業

1965 昭和40
財団法人日本身体障害者スポーツ協会（現、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会）設立
第1回全国身体障害者スポーツ大会、岐阜県にて開催される
これが全国的な競技会の始まりとなる

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1970 昭和45
財団法人日本肢体不自由者リハビリテーション協会、財団法人日本障害者リハビリテーション協会に改称
1973 オイルショックが始まる

1974 藤原進一郎氏、大阪市民生局事務吏員、福祉部障害福祉課主査に着任
藤原進一郎氏、大阪市身体障害者スポーツセンターへ指導課長として出向

1976 ロッキード事件が表面化
1978 日中平和友好条約を調印

1980 藤原進一郎氏、アーネムパラリンピックにて日本選手団コーチを務める

1981 昭和56
財団法人日本障害者リハビリテーション協会、障害者リハビリテーション振興基金を創設
1981 藤原進一郎氏、財団法人日本身体障害者スポーツ協会技術委員会委員長に着任

1982 東北、上越新幹線が開業

1984 昭和59
ニューヨーク・アイレスベリーパラリンピック開催
財団法人日本障害者リハビリテーション協会、障害者リハビリテーション指導者養成研修を開始
1984 藤原進一郎氏、ニューヨークパラリンピックにて日本選手団監督を務める

1986 藤原進一郎氏、福祉部副参事に就任
藤原進一郎氏、大阪市障害更生文化協会へ出向

1987 昭和62
財団法人日本障害者リハビリテーション協会、総合リハビリテーション研究大会を開催

1988 昭和63
ソウルパラリンピック開催
1988 藤原進一郎氏、ソウルパラリンピックにて日本選手団総監督を務める

1990 藤原進一郎氏、財団法人日本身体障害者スポーツ協会評議員に就任
藤原進一郎氏、大阪市身体障害者スポーツセンター参与に着任

1992 平成4
バルセロナパラリンピック開催
1992 藤原進一郎氏、バルセロナパラリンピックにて日本選手団監督を務める

1993 藤原進一郎氏、大阪市身体障害者スポーツセンター副館長に就任

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 平成8
アトランタパラリンピック開催
1996 藤原進一郎氏、アトランタパラリンピックにて日本選手団総監督を務める

1997 香港が中国に返還される

1998 平成10
長野パラリンピック開催
1998 藤原進一郎氏、長野パラリンピックにて日本選手団総監督を務める
藤原進一郎氏、財団法人日本身体障害者スポーツ協会理事に就任
藤原進一郎氏、財団法人大阪市障害者スポーツ協会理事に着任

1999 平成11
財団法人日本身体障害者スポーツ協会、財団法人日本障害者スポーツ協会に改称
1999 藤原進一郎氏、日本パラリンピック委員会運営委員に着任

2000 平成12
シドニーパラリンピック開催
2000 藤原進一郎氏、シドニーパラリンピックにて日本選手団長を務める

2008 リーマンショックが起こる

2011 藤原進一郎氏、日本体育協会・日本オリンピック委員会「創立100周年記念特別功労者表彰」を受賞
2011 東日本大震災が発生

2015 平成27
公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、創立50周年記念式典を開催

オリンピック・パラリンピック年表

	オリンピック	パラリンピック
1896	第1回 アテネ[ギリシャ]	
1900	第2回 パリ[フランス]	
1904	第3回 セントルイス[アメリカ]	
1908	第4回 ロンドン[イギリス]	
1912	第5回 ストックホルム[スウェーデン]	
1916	第6回 ベルリン[ドイツ]＊中止	
1920	第7回 アントワープ[ベルギー]	
1924	第8回 パリ[フランス]／第1回 シャモニー・モンブラン[フランス]	
1928	第9回 アムステルダム[オランダ]／第2回 サン・モリッツ[スイス]	
1932	第10回 ロサンゼルス[アメリカ]／第3回 レークプラシッド[アメリカ]	
1936	第11回 ベルリン[ドイツ]／第4回 ガルミッシュ・パルテンキルヘン[ドイツ]	
1940	第12回 東京[日本] ＊返上 → ヘルシンキ[フィンランド] ＊中止	
1944	第13回 ロンドン[イギリス] ＊中止	
1948	第14回 ロンドン[イギリス]／第5回 サン・モリッツ[スイス]	
1952	第15回 ヘルシンキ[フィンランド]／第6回 オスロ[ノルウェー]	
1956	第16回 メルボルン[オーストラリア]／ストックホルム[スウェーデン] 第7回 コルチナ・ダンペッツオ[イタリア]	
1960	第17回 ローマ[イタリア] 第8回 スコーバレー[アメリカ]	第1回 ローマ[イタリア]
1964	第18回 東京[日本] 第9回 インスブルック[オーストリア]	第2回 東京[日本]
1968	第19回 メキシコシティー[メキシコ] 第10回 グルノーブル[フランス]	第3回 テルアビブ[イスラエル]
1972	第20回 ミュンヘン[西ドイツ] 第11回 札幌[日本]	第4回 ハイデルベルグ[西ドイツ]
1976	第21回 モントリオール[カナダ] 第12回 インスブルック[オーストリア]	第5回 トロント[カナダ] 第1回 エンシェルツヴィーク[スウェーデン]
1980	第22回 モスクワ[ソ連] 第13回 レークプラシッド[アメリカ]	第6回 アーネム(アルヘルム)[オランダ] 第2回 ヤイロ[ノルウェー]
1984	第23回 ロサンゼルス[アメリカ] 第14回 サラエボ[ユーゴスラビア]	第7回 ニューヨーク[アメリカ] アイレスベリー[イギリス] 第3回 インスブルック[オーストリア]
1988	第24回 ソウル[韓国] 第15回 カルガリー[カナダ]	第8回 ソウル[韓国] 第4回 インスブルック[オーストリア]
1992	第25回 バルセロナ[スペイン] 第16回 アルベールビル[フランス]	第9回 バルセロナ[スペイン] 第5回 ティーニュ/アルベールビル[フランス]
1994	第17回 リレハンメル[ノルウェー]	第6回 リレハンメル[ノルウェー]
1996	第26回 アトランタ[アメリカ]	第10回 アトランタ[アメリカ]
1998	第18回 長野[日本]	第7回 長野[日本]
2000	第27回 シドニー[オーストラリア]	第11回 シドニー[オーストラリア]
2002	第19回 ソルトレークシティ[アメリカ]	第8回 ソルトレークシティ[アメリカ]
2004	第28回 アテネ[ギリシャ]	第12回 アテネ[ギリシャ]
2006	第20回 トリノ[イタリア]	第9回 トリノ[イタリア]
2008	第29回 北京[中国]	第13回 北京[中国]
2010	第21回 バンクーバー[カナダ]	第10回 バンクーバー[カナダ]
2012	第30回 ロンドン[イギリス]	第14回 ロンドン[イギリス]
2014	第22回 ソチ[ロシア]	第11回 ソチ[ロシア]
2016	第31回 リオデジャネイロ[ブラジル]	第15回 リオデジャネイロ[ブラジル]
2018	第23回 平昌[韓国]	第12回 平昌[韓国]
2020	第32回 東京[日本]	第16回 東京[日本]

夏季大会
冬季大会
藤原進一郎氏参加大会

パラリンピック・障害者スポーツに関する主なできごと

1888 ドイツで聴覚障害者のためのスポーツクラブが創設

1910 ドイツ聴覚障害者スポーツ協会が創設

1924 国際ろう者スポーツ連盟CISSが設立
第1回国際ろう者スポーツ競技大会開催

1948 ストーク・マンデビル病院内で車いす患者によるアーチェリー大会を開催。これがパラリンピックの原点となる

1952 第1回国際ストーク・マンデビル大会開催

1960 国際ストーク・マンデビル大会委員会ISMGC設立
第1回パラリンピックと位置づけられる国際ストーク・マンデビル大会開催

1976 国際身体障害者スポーツ大会が、初めて国際ストーク・マンデビル競技連盟ISMGFと国際身体障がい者スポーツ機構ISODの共催で行われる

1980 視覚障害者の国際的なスポーツ団体である国際視覚障害者スポーツ協会IBSAが設立

1985 国際オリンピック委員会IOCは国際調整委員会ICCがオリンピック年に開催する、国際身体障害者スポーツ大会を「Paralympicsパラリンピックス」と名乗ることに同意する

1986 国際聴覚障害者スポーツ協会と、国際精神薄弱者スポーツ協会がICCに加盟

1989 国際パラリンピック委員会創設

1999 日本パラリンピック委員会創設

スポーツ歴史の検証
Sport History

1933年　幼児期（1年2ヵ月）

1958年　修学旅行の列車内で生徒と

1958年　修学旅行で江ノ島へ

1952年　中国・四国インカレ（松江）（右から2人目）

1958年　三都市対抗陸上400mリレー
西畑から藤原のバトンパス

1967年　全国学校体育研究大会研究授業（中央）

1977年　第2回FESPIC大会にコーチとして参加
（パラマッタ/オーストラリア）（右から2人目）

1977年　第2回FESPIC大会（パラマッタ/オーストラリア）（後列左端）

1979年　初めて参加したストーク・マンデビル大会で跳躍審判員を務める（右）

1980年　アーネムパラリンピック開会式、コーチ

1980年　アーネムパラリンピック開会式後のスタンド
コーチ（左から2人目が藤原進一郎、右から4人目が中村博士）

1987年　三笠宮妃殿下センターご視察

1997年　“ふれ愛ピック大阪”で皇太子ご夫妻にご説明

1996年　アトランタパラリンピック前に
磯村大阪市長を表敬訪問（後列右から3人目）

1998年　長野パラリンピック

2004年　アテネパラリンピックにて
（右はIPC役員のスーさん）

2001年　大阪パラリンピック招致活動
（モスクワIOC総会にて）

2006年　FESPIC大会（クアラルンプール）
畑田会長より連盟表彰受彰

2014年　平野中学同窓会に恩師として出席

藤原進一郎

現在の長居障がい者スポーツセンター全景